

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

パイレーツ・オブ・カリビアン

配給/ブエナ ビスタ インターナショナル (ジャパン)

2003 (平成15) 年8月3日鑑賞

Data

監督: ゴア・ヴァービンスキー
製作: ジェリー・ブラッカイマー
出演: ジョニー・デップ/ジェフリ
ー・ラッシュ/オーランド・
ブルーム/キーラ・ナイトレ
イ

👁️👁️ みどころ

17世紀のカリブ海を舞台に展開される海賊たちを中心とした夢とロマンの大活劇。ストーリーの基本は最後の「一枚の金貨」。この金貨を探し出さない限り、呪われた海賊たちが人間に戻ることはできないのだ。第1のポイントは、海賊船ブラックパール号の現船長バルボッサと元船長ジャックとの確執。そして第2のポイントは、金貨を持っていたため海賊に連れ去られた総督の娘エリザベスと彼女を救出する一念に燃える若者ウィル・ターナーとの恋とアクション。2時間23分の間、決してあきることなく、冒険とアクションを楽しむことができる。こんな映画は超おすすめだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<一枚の金貨をめぐる痛快活劇！>

ストーリーはいろいろ複雑に展開される。しかしややこしい話を横におくと、話は単純。すなわち一枚の金貨の争奪戦だ。

かつてのスペインの征服者コルテスがアステカ人を虐殺して手に入れた「呪われた金貨」を貪欲に強奪し尽くした海賊のキャプテン・バルボッサは、その報いとして手下と共に生きながら死者となり、肉を失い、骨だけの姿となった。どれだけ食べ、どれだけ飲んでも、飢えと乾きに責め苛まれ、しかも死ぬことさえできないのだ。死より苦しい地獄から逃れ、呪いを解く方法ただ一つ、コルテスの金貨を一枚残らず集め、アステカ人の流した血を新たな血によってあがなうことしかない。そのため、バルボッサは最後の金貨を探し求めていた。

＜正統派の主人公ウィル・ターナーと行動派の美女エリザベス・スワン＞

物語は、総督の娘エリザベス・スワン（キーラ・ナイトレイ）が12歳の時、カリブ海の沿岸の植民地の町ポートロイヤルの総督に赴任する父と共にカリブ海を航行中、海賊に襲われた船から流されてきた1人の少年を発見し救助するシーンからスタートする。この少年が首にかけていたのが海賊のシンボルである髑髏のマークが刻まれた一枚の金貨。エリザベスはとっさにこの金貨を引き剥がして隠し持ち、以降自分の宝物としていた。

それから8年。エリザベスは総督の娘としてイングランドの上流階級の中に育ちながらも、自由を夢見る行動派美女に成長した。

他方、救助されたウィル・ターナー（オーランド・ブルーム）も、今はポートロイヤルの町で、鍛冶屋職人ながら、刀鍛冶に精を出す立派な若者。身分はわきまえているものの、エリザベスに対して憧れの気持ちを持っている。そして当然ながら海賊は大嫌い。ところが運命の皮肉が……。実はこの主人公ウィル・ターナーの父は有名な海賊だった。しかも金貨の呪いを解くことができるのは、父親ビル・ターナーの血をひく息子のウィル・ターナーなのだ。

ウィルを演じるのは『ロード・オブ・ザ・リング』でエルフ族の弓の名手レゴラスを演じたオーランド・ブルーム。本作品では海賊の息子でありながら、英国風の礼儀と武術を身につけたスマートな若者をカッコよく演じている。

他方、エリザベスを演じるのはキーラ・ナイトレイ。1983年生まれだから今ちょうど20歳。今までの目立つ役は、『ベッカムに恋して』（02年）への出演程度だが、イギリス生まれの正統派美女。呪われた金貨を持っていたため、海賊バルボッサにさらわれ、さまざまな試練に直面するが、単なる「お姫様」ではなく、知恵も度胸も腕力もある魅力的な役柄をたくましく演じている。そして最後は当然ながら、ウィルとのキスシーンでハッピーエンド。これからの活躍が楽しみな女優だ。

＜魅力あるキャプテン、ジャック・スパロウとバルボッサ＞

呪われた海賊のキャプテン、バルボッサを演じるのはジェフリー・ラッシュ。『シャイン』（96年）でアカデミー主演男優賞を獲得し、『クイルズ』（00年）では、小説を書くことへのあくなき執念を示すあのマルキ・ド・サドを熱演して、アカデミー主演男優賞候補となった名優だ。彼は他にも、『恋におちたシェイクスピア』（98年）、『レ・ミゼラブル』（98年）、等多くの作品で活躍する演技派俳優だ。

もう1人の謎のキャプテン、ジャック・スパロウを演じるのはジョニー・デップ。『フロム・ヘル』（01年）、『ロスト・イン・ラ・マンチャ』（02年）等に出演している、これも演技派俳優。本作品では、ものすごい能力を持っているクセにちょっと間の抜けた役柄のジャック役をひょうひょうと面白く演じている。

今はブラックパール号の船長となっている、「呪われた海賊」のバルボッサは、実は元ジ

ジャックの手下だった。つまり、ジャックが元ブラックパール号の船長だったわけだ。ジャックを裏切ったバルボッサは、自殺用の1発の弾丸とピストルを残してジャックを無人島に置き去りにしたが、不屈の船長ジャックはそこから脱出し、バルボッサへの復讐を狙っていた。

<さらわれたエリザベスの救助へ向かうのは！>

ある日、ポートロイヤルの町はブラックパール号に襲撃された。船からの砲撃と、剣で刺されても死なない、タチの悪い海賊たちの上陸の前に、町は蹂躪され、金貨を持っていたエリザベスは連れ去られてしまった。しかも、名前を聞かれたエリザベスは、とっさに、何とターナーと名乗ってしまったのだ。エリザベスには結婚してターナーの姓を名乗りたいという潜在的欲望があったか・・・？

さらわれたエリザベスの救助に向かうのは、ウィルとジャック。今は捕らえられ、牢に入れられているジャックは、実は元ブラックパール号の船長。従って、ブラックパール号の停泊地を知っている。そして、かつての手下であったバルボッサへの復讐心に燃えている。

他方、ウィルは何としてもエリザベスを助けたい。そのためには、何が何でもブラックパール号を追跡しなければならぬ。そこで、「ジャックを牢から脱出させてやる。その代わりにジャックはウィルをブラックパール号まで案内する」という、ウィルとジャックとの間の「取引」が成立した。

さすが元ブラックパール号の船長ジャックの知恵はすごい。見事な作戦と機転で停泊中の英国海軍の高速帆船インターセプター号をたちまち乗っ取ってしまった。そしてジャックはかつての知り合いの水夫たちを寄せ集め、ブラックパール号「追討」への出発だ。

<すさまじい情報戦と知恵比べ>

①ジャックのバルボッサに対する復讐心、②呪いを解くため最後の一枚の金貨とターナーの血へ執念を燃やすバルボッサの執着心、③エリザベスを救い出したい一念のウィル。その一念のウィルはジャックと結びついた。そして、④遅まきながら、エリザベスの救出に向かった英国海軍の提督ノリントン（ジャック・ダヴェンポート）。彼はエリザベスとの結婚を当然のことと考えていたが、英国紳士らしく、今はエリザベスへ求婚中であり、エリザベスからの返事待ちの状態だ。

これら各人物の思惑が入り乱れながら、物語は複雑に展開されていく。その情報戦と知恵比べは見モノだ。たかが海賊、とあなどることなかれ。

<ちょっと勉強、「取引」とは・・・>

面白いのは映画の中で語られる「取引」のこと。契約社会のイギリスでは、既に17世

紀頃から「取引」という概念があったことがよく分かる。最初の「取引」はジャックとウィルとの間で、ジャックを牢から出すかわりにウィルをブラックパール号まで案内するというもの。これは、その解釈をめぐって、多少のイザコザはあったものの、概ね合意通りに履行された。そして次の「取引」が行われたのは、バルボッサとエリザベスとの間。エリザベスはバルボッサが欲しがっている金貨を渡す代わりにエリザベスの釈放を要求し、取引が「成立」した。ところがバルボッサはエリザベスを船から返さない。債務不履行問題の発生だ。しかし、「約束違反！」と迫るエリザベスに対するバルボッサの回答（反撃）は、第1に金貨をもらってもエリザベスを「いつ、どうやって」釈放するとは約束していないということ。第2に「掟」は杓子定規なものではなく、「ガイトライン」を示しているにすぎないということ。これが法廷でも通用する理屈かどうかは別として、何とも理屈っぽい海賊の理論展開の巧妙さに、さすがと感心・・・。

もう1つ面白いのは、海賊の「掟」が語られ、この映画に登場する海賊たちはみんなそれを遵守しようとしていること。これも、海賊といえども契約社会の民族の一員だということが分かって興味深い。

<「大航海時代」の手ほどき>

以下、「大航海時代」の歴史についての「手ほどき」をひとしきり・・・。

「パイレーツ・オブ・カリビアン」とは、直訳すれば「カリブ海海賊」ということ。カリブ海とは北アメリカと南アメリカの間の海、キューバ島などが浮かぶ海だ。カリブ海で海賊が活躍したのは、16世紀～17世紀のこと。それに先立つ「大航海時代」とは、15世紀末から16世紀のはじめの時代だ。

大航海時代の出発点はポルトガルのバルトロメウ・ディアスによる1488年のアフリカ最南端の喜望峰（希望の岬）の発見。そしての10年後の1498年にはポルトガルのバスコ・ダ・ガマは、喜望峰を回航してインドに至るインド航路を開拓した。これにより一躍ポルトガルは大航海時代のスターターとしての地歩を固めることになった。

他方、ポルトガルに遅れをとったスペインはコロンブスの計画に乗った。コロンブスは地球は球体だと信じ、マルコポーロの情報などを総合して、大西洋を西へ西へと進めば、インドに到達すると確信して、その計画を最初にポルトガルに売り込んだ。しかし、ポルトガルは既にアフリカ廻りのインド航路を開拓していたため、コロンブスの計画に乗らなかつた。そこで、コロンブスはやむなく、今度はスペインに自分の計画を売り込み、イザベラ女王に対して、

コロンブスは、①インドで発見した宝の10分の1の獲得、②発見した土地の総督と副王の地位、③大洋提督の称号、④スペイン貴族の地位、という「厚かましい」要求を受け入れさせたうえ、サンタマリア号以下3隻の船で西へ向かった。そして、発見したのが西インド諸島のサン・サルバドル島だ。コロンブスはこれをつきりインドだと思い込み、

これらの島々は西インド諸島と名付けられた。従って、一般的に私たちが習った、「1492年にコロンブスがアメリカ新大陸を発見した」というお話は本当はウソ。

ちなみに、はじめて船に乗ってアメリカ大陸の反対側に出たのはマゼラン。そして彼はそのまま1519年から1522年にかけて世界一周航海を成し遂げた。後にマゼラン海峡と名付けられた南アメリカの南端の海峡を通過してはじめて太平洋へ出たわけだ。

このように大西洋航路によって、西インド諸島を「発見」し、南北アメリカ大陸に勢力を伸ばしたスペインは、ここに大植民地を築いていった。そしてスペインは、メキシコやペルーに銀山を発見し、これを大輸送船団に乗せて祖国に持ち帰っていたのだ。

もっと詳しく、「大航海時代」の歴史を勉強したい方は、是非、ホームページで世界史講義録—第54回大航海時代1、第55回大航海時代2 (<http://www.geocities.jp/timeway/kougi-54.html>, [kougi-55.html](http://www.geocities.jp/timeway/kougi-55.html)) 等を参照してもらいたい。

<海賊の活躍とその魅力>

そこで「活躍」したのが、パイレーツ・オブ・カリビアン。彼らはスペインの輸送船団を次々と襲って、莫大な金銀財宝を手に入れていた。スペインに対抗して、力をつけてきていた後続の小国イギリスは、エリザベス女王の時代においては、スペインへの対抗上、この海賊に対して、免許状を与えて略奪を奨励したことがあったほどだ。

しかし、17世紀に入ると、さすがにそんなバカなことはやめようということになり、スペインとイギリスとの間で条約が締結され、私掠の免許状下付は禁止された。そのため「わが世の春」を謳歌していた海賊の時代は、はかなくも崩壊してしまったわけだ。

海賊の魅力とは何か。それは自由と平等社会だったということ。国王陛下が治める国、スペインやイギリスでは、厳しい階級社会の中、庶民は何の自由もなくこき使われ、国王陛下や貴族のために働かされるだけの存在だった。

しかし海賊は・・・確かに他人のものを略奪するのは良くないことだが、海賊社会の中は平等であり、自由があった。一種の自治社会になっていたわけだ。パンフレットによると、自由な海賊のユートピアをマダガスカル島につくろうと夢見た海賊たちもいた、と書かれている。

<楽しい楽しいアドベンチャー劇！>

この映画のストーリーは複雑だが、何しろ1つ1つのストーリーやスクリーンでの動きには活力があるから観ていてめっぽう楽しい。

最初のジャックとウィルとの剣での決闘シーンやイギリス海軍自慢の帆船の争奪戦、海賊船同士の銃撃戦と体当たりの戦い、そして月明かり中での人間の身体から骸骨の身体への変身、さらには骸骨軍団と英国正規軍との闘い、財宝の山となっている根拠地での、「呪

われた金貨」の返還儀式、等々楽しいシーンがいっぱいだ。

2時間23分という長い上映時間を全く感じさせない冒険アクションを、意外性の連続の中、飽きさせることなく見せつけてくれる。そして最後のハッピーエンドは予定された通りの筋書きで分かりやすい。こんな楽しいアドベンチャーワールドはいつでも大観迎だ。

2003（平成15）年8月4日記